

中西伴浩さんのライフストーリー

～町作りと共にある人生～

北海道大学 まいの ゴウ

○中西伴浩さんってどんな人？

はじめに会ったとき、中西さんはベージュのスーツの上着で、中は茶褐色のタートルネックのセーターで、さっぱりした身なりをしていました。インタビューを始めた私たちに対して、中西さんは少しも不快そうな様子がなくて、詳しく語ってくださいました。とても優しい方だったので、私たちも初めは緊張していましたが、リラックスした状態で取材に臨めました。

取材をする中で、私たちが何か質問するとすぐに答えてくださったので、中西さんは頭の回転が速い方だと思いました。尚且つ、以前会ったことがなくても、彼の話聞いてから、秩父別町が見知らぬ所ではなく、みんなの故郷のような感じがしました。

○現役農家として語る！秩父別町の主産業、農業はどうなる？

秩父別は農業が発達している町です。この町で農家に生まれ育った中西さんは、子供の時代から農家をやろうと思っていたため、高校や大学では農業を専攻して、ご両親から28歳のときに農家としての仕事を引き継ぎ、今でも奥さんと二人で毎日働いて主にお米を作っています。隣町の高校に通うお子さんを駅まで送り届けたあと、夕方17時ぐらいまでずっと農作業を行っています。

秩父別町では多くの方が農業に従事しており、米やブロッコリー、トマトなど様々な作物が育てられています。そのような環境で同様に農業に従事する中西さんは秩父別町の主産業である農業について非常にたくさんの思いを抱えています。

中西さんは、この町が存続していく方法を考えていくうえで、現在の農業における問題点を見いだしています。それは「労働力不足」です。高卒ですぐに家業を継いでいた人が多かった数十年前と比べ、町を出る人が増え、結婚も難しい現代では、農業に従事する人口が減ってきています。そのため、最近では求人サイト等でアルバイトを募集して一緒に働いてもらうこともあります。中西さんも、奥さんと農作業に励むときはアルバイトの方を数人雇って一緒に働いてもらうそうです。この方法で労働力を補えているように思われますが、これはまだ本格的に廃れ行く農業を救う手立てにはなりません。アルバイトを雇う際には任せる作業を一つ一つ説明しなければならぬので、どうしても作業にかかる時間が削られてしまい、これは本格的な技術の引き継ぎにはなり得ないと中西さんは仰います。

また、今後の農業のあり方として、米農家を例として「規模を拡大する」方法と「イオンなどの大企業に任せる」方法をあげています。規模の拡大ではその分必要とする労力が増加しますし、農業機械にかかるお金も増えてしまいます。その代わり、交渉次第では農家側になるべく利があるようにお米を売ることができるとは限りません。大企業に任せると、社員さんが育てることになり、農業自体は廃れないでしょうし安い

お米をたくさん作ることができます。

この話をふまえ私たち二人で行った編集会議で、「自分が人を雇って働かせるのはどうか」という考えが
出ましたが、雇用するにもお金がかかるというのはもちろん、そこには自らの手で作業する喜びがないじゃ
ないかとおそらく中西さんは答えるでしょう。この言葉は今後、広範囲化・機械化する農業の話をしている
中で出てきた言葉ですが、この言葉の中に幼少期から農業と関わって生きてきた中西さんの農家として
の側面がすべて詰め込まれているような気がします。

中西さんはご自身が農家であることから、秩父別町の町を支える農業について常に先を考えていらっし
やいます。どの方法が正しいのかなど、今のところ不安な点はつきませんが、彼は秩父別町の町作りをし
ていくなかで模索し続けているのです。

○中西さんとこの町～議員としての町作り～

中西さんは、人口が約2500人だけの秩父別町で、議員の一人として町作りに携わっています。

彼が議員になったのは、12年前、自身が所属していた町の青年団のメンバーに後押しをしてもらったた
め、立候補したのがきっかけです。彼は一生を、短大とその卒業後の数年を除いて、この町で過ごしてい
るため、秩父別を最も知っている方と言えるでしょう。

議員として町作りのどこに重点を置くかと聞かれた時、秩父別町は現在、子供の出生が減っていて、人
口減少の問題に直面していて、やはり子育て支援に重点を置いているのだと答えてくださいました。人口
減少について要因、解決策と現状などをいろいろ述べてくださいました。

その要因の一つは教育施設が足りないことです。町内には幼稚園と小学校、中学校がありますが、高
校に進学すると、となりの市に行けなければなりません。引越しをしないと、学校に通うことも大変になっ
て、友達と遊ぶことも部活に入ることもできなくなるようになるそうです。中西さん自身もお子さんがいるの
で、彼は子育てについての問題に特に着目しています。

二つ目の要因は高卒や大学卒の新卒が働ける職場がないことです。唯一ある仕事は役場の職員です
が、毎年数名の採用であり、全員が就けるわけではないのです。そこで、町を出て働くことにする人が多
いです。

三つ目の要因は交通が不便なことです。この問題は特に冬になると深刻になります。秩父別町は札幌
市から車で3時間ほどかかり、都市からわざわざこの町に来て暮らす必要を感じない人が大多数でしょう。
逆に、この気象を利用して、本州に住んでいる人々が雪の無い時期に秩父別町で暮らして、また冬が来
ると本州へ帰るといった事例もあります。そのほか、また様々な理由で人口減少が続いています。

中西さんの話から今この町がどのような状況にあるか、だいたい分かりました。彼はこの町に愛着を持っ
ています。人口が減っていて、この町もまたいつまで存在できるか分からないという現状は、地元民である
中西さんにとっても不安でいっぱいでしょう。インタビューでは中西さんの故郷への思いと心配もひしひし
と感じられました。

○秩父別町に眠る地域芸能「獅子舞」

皆さんは、秩父別町に獅子舞文化が残され伝えられてきている事はご存じでしょうか。

秩父別町の獅子舞は、他の獅子舞が有名な地域のものとはひと味違います。秩父別町の獅子舞は、屯田兵が北海道に来て開拓を始めたころ、四国の屯田兵たちによってもたらされたものです。日本に残されている獅子舞のほとんどは富山県由来のもので、羽織の中に3人ほど人が入ったり獅子の前で子どもが踊ったりする形がポピュラーとされていますが、四国由来の獅子舞では獅子の前で天狗が踊るあるいは獅子のみが舞うのが特徴です。全国各地を見ても、秩父別町を初めとして深川市や栗山町など数十カ所にしか残っていないそうです。

中西さんは、この「獅子舞」を地域芸能として保全し伝えていくことで郷土愛を育て、秩父別町に愛着を持たせることで町を支えようと考えています。

中西さんが獅子舞の保全に関わるようになったのは農家を継いだばかりの28歳のときでした。北海道の教育委員会から大人と子どもが共に活動する組織を作りなさいと町にお達しがあり、その組織の活動内容として声が上がったのが獅子舞だったのです。最初はまだ当時存在していた秩父別町の高校や中学校の子どもたちに獅子舞を教えていて、当時教わった子どもたちも今は大人になり、今度は共に獅子舞を伝える側になっています。中西さんに小学生のお子さんがいることから、ここ数年で小学校に教えに行くようになりました。

その発表の場として、現在は秋祭りで獅子舞を披露しています。中西さんはこの秋祭りを、子どもたちが練習してきた成果を発揮する場として機能させたいと考えており、またこの秋祭りで獅子舞の披露が秩父別町に戻ってくる理由になればいいなと考えています。町に人が戻ってきて、これで秩父別町が安定して続いていくなれば、秩父別町でずっと生きてきて、それゆえに町の存続を誰よりも望む彼自身が救われるのです。

中西さんの獅子舞の話聞いて、私たちはその楽しそうに話す姿から、この活動の楽しさや、獅子舞にかけている情熱を強く感じ、ぜひ私たちも秩父別町に伝わる獅子舞を踊ってみたいと思いました。私たち二人がそれぞれよく知っている獅子舞とは別の特別な獅子舞はとても魅力的でした。

○今、未来のためにできることをしよう

中西さんはインタビュー中、町の存続について、またその町の主産業である農業について、問題点と今行っている対策を数多く語って下さいました。その話す様子からは、心から秩父別町を守りたいという気持ちがあるのだということがひしひしと伝わってきました。

中でも中西さんは子育て支援に重点をおいているようです。彼自身が4人のお子さんを育てているため、リアルな意見を議会に持っていけると言います。また、彼は秩父別町の好きなところとして「子どもが好きな人が多く、子どもたちのためになりたいと思う人が多い」と仰いました。だから子どもに関する政策はみな積極的に取り入れようとしてくれるとも。中西さんも例に漏れず、子どもが好きな人なのだなと話を聞きながら思います。子どもたちに獅子舞を教える活動の話をしているときの明るい声色がそれを物語っています。

した。

中西さんにインタビューをして、私たちは彼がただ自分の生きてきた場所である秩父別町を守りたいだけでなく、この先秩父別町で生きていく子どもたちに自分の好きなこの町をなるべくよい状態で引き継ぎたいという考えがあるのかもしれないと思いました。私たちが秩父別町にいたのは一泊二日という短い間でしたが、町を散策したり町の方と交流したりして、秩父別町の静かで落ち着いた雰囲気や町民の方々の適度な距離感が心地よく、また食べ物もおいしく、とても過ごしやすい素敵な町だと感じました。この町がこれから先もずっと続いていくことを私たちも願っています。



↑左から、ゴウ、中西さん、まいの。町のことを本当によく考えていらっしゃる素敵な方でした。(ファミリースポーツセンターにて。2019年12月7日撮影。)